

本当の意味で新しいと言えるデザインに出会ったとき、最初はそれが何ものであるのか全く理解できず、とまどう。脳から全ての言葉が消えてしまったみたいに、話すことが出来なくなる。言葉の通じない知らない土地に一人取り残されたような感じ、と言えればいいか。

取り残されたように感じる理由はたぶん、その作品が通常のデザインの文脈に全く載っていないからだと思う。文脈に載っていないものを客観的に位置づけることはとても難しい。対比物がないと距離や大きさが測れないのと同じだ。比べる物が無いほどに、過去のあらゆる作品に似ていない。そういう作品に出会うと、わかったつもりでいたデザインのことが、またわからなくなる。デザインが新しいというのは、そういうことだと思う。

2007年に長崎県美術館で行われた展覧会で「井伊直弼(中)」を見たときに感じたのは、この感覚である。あまりにもあっけらかんと歴史上の人物のシルエットのままにデザインされたこの鏡は、「日本的な何か」がテーマであるのに、知っているという感じが全くしない。取り上げられているのも、歴史の教科書でしか見ないような地味な人物。そこにヒントがあるように感じて、「日本史」というテーマを思いついた。このテーマで清水久和に作品の制作を依頼することにした。「日本史」というテーマを清水に投げかければ、誰も見たことの無い作品が出来上がるに違いないと思った。制作の過程に関われば、新しさの中身を理解できるかもしれない、という欲もあった。

打ち合わせで、清水はまず、既にじゅうぶんに大きな「井伊直弼(中)」を、さらに大きくすると言った。会場はまだ決まっていなかったから、会場に合わせたわけではない。それから、切り落とされた武士の髷(まげ)を大きくし、それをプロダクトにするとも言った。髷に機能を持たせるべきか、どういう機能であるべきかについて何回かのやりとりがあった。髷は最終的に、石垣状の台に乗った巨大な貯金箱になった。

完成した作品はやはり、誰も見たことの無いものとなった。この二作品を初めて見る人は皆、笑えばいいのか怒ればいいのかわからず、とまどいの表情を浮かべる。それでも、作品がより大きくなり、二つになったことで、解釈の入り口が少しだけ開いたように思う。

「大きさ」は手段である。大きくすることは不経済な行為で、必然性を欠いた技術と労力、無駄に広い置き場所を要求する。大きなものにはそれだけのエネルギーが込められている。だから見る者はそこに何か特別な意志があるはずと思う。同時に、大きくなることで、鑑賞者が作品に「近づく」。いい写真を撮るためには対象に寄ることが必要のように、作品を理解しようとするれば、近づかなければいけない。「大きさ」は自ずとその状況を作る。「自分と対象物だけ」の世界、あるいは「物の前で自分の存在が消えかかっている」状況が作られる。

「井伊直弼(大)」と「髷貯金箱」は大きいことによって、観る者をそういう状況に置く。そうして初めて、井伊直弼について、髷について、人は本気で考えるようになるのだ。そこから先は人それぞれ。だから、どうかじっくり観てもらいたいと思う。筆者はといえば、考えたのは以下のようなことだ。

井伊直弼は幕末の権力者で、開国を主張してアメリカと通商条約を結び、反対派を強力に排除して多くの敵を作り、桜田門外で暗殺された。今の日本ができる上でとても大きな役割を果たした人だが、歴史の授業でも大河ドラマでも、いつも悪役として描かれる。この人物の取り扱われ方には、歴史に対する日本人の矛盾した感情が現れているように思う。井伊直弼(に象徴される権力)の存在なしにありえない今の私たちが、井伊直弼によって失われた文化に愛着を抱くがゆえに井伊直弼を憎む。オイディプスの物語みたいだ。井伊自身が髷を結った武士であったことを忘れてはいけない。井伊直弼は権力に着く前、世捨て人のように暮らし、優れた茶人であったという。井伊もまた自らの二面性に引き裂かれていた。

他の誰でもなく、井伊直弼を鏡のモチーフにすることは、この矛盾をクローズアップすることだ。それはそのまま、歴史と自分のリアルな関係を棚上げし、フィクションとして描かれる「日本風」のデザインに対する批判となる。鏡に映るのは自分の全身。人ごとではない。

切り落とされた髷は、井伊によって葬り去られた過去の文化に属している。我々が愛着を抱く「失われた文化」を象徴するものだ。髷は武士の魂であり、髷を落とすことは武士にとって死ぬこと同然であった。切り落とされた髷は、かつてあった制度や、それが支えた誇りの不在を現す。石垣の上に乗った巨大な髷は、大きな「無いもの」である。髷が貯金箱である理由もそこから明らかだ。清水は髷に小さなスリットをあけるといって最低限の操作で、髷が空っぽであることを示した。我々が愛着を感じる過去の文化には、もはや中身がない。お金を貯めることは可能だが、空虚は満たされないだろう。